

## ロシアにおける文学的<レノーレ譚><sup>1</sup>

飯田 梅子

### はじめに

<レノーレ譚>は、「死者が愛する者を墓場から迎えに来る」という民間伝承のモチーフをもとにしたもので、ビュルガー（Gottfried August Bürger, 1747-1794）のバラッド詩『レノーレ』（*Lenore*, 1774）により、文学作品にとり入れられるようになった。『レノーレ』以後、同様の筋を有する作品を<レノーレ譚>と呼ぶようになり、ロマン派時代のヨーロッパで大流行したが、ロシアでもジュコーフスキイ（Василий Андреевич Жуковский, 1783-1852）の翻案詩『リュドミーラ』（*Людмила*, 1808）をきっかけに、ロマン派の多くの作品に採り入れられた。ロシア文学における<レノーレ譚>の伝統は、<吸血鬼譚>などと結びつきながら、詩や散文のジャンルをこえて継承され、多くの詩人・作家の作品に結実した。

本稿では、18世紀末以降のロシア文学における<レノーレ譚>の諸相を素描する。まず、<レノーレ譚>の筋を構成するモチーフを抽出し、<レノーレ譚>の定義を試みる。さらに、ロシアにおける文学的<レノーレ譚>について、モチーフの組合せと起源を基準に分類し、その特徴を検討する。その上で各作品を通時的に概観し、ロシアの文学的<レノーレ譚>の全体像を結ぶことを目指す。

<sup>1</sup> 同テーマについて、執筆者はこれまで論文「ロシアにおける『レノーレ』受容」（『文化と言語』第75号、2011年、137-172頁）を發表し、口頭發表「ロシア文学と<レノーレ譚>」（2013年日本ロシア文学会第63回大会、2013年11月2日、東京大学）を行った。本稿はこれらの研究を發展させたものである。

## 1. 先行研究

ロシアにおけるフォークロア的<レノーレ譚>の起源と分布、および、ビュルガーの『レノーレ』の伝播に伴い広く創作された文学的<レノーレ譚>の系譜に関する研究は、ヨーロッパで教育を受けたスラヴ・フォークロア研究者、ならびにスラヴ系ギリシア研究者によって着手された。

19世紀末、モスクワ生まれのドイツ人スラヴ文学者ウォルナーは、スラヴ世界に分布する<レノーレ譚>的民間伝承の存在を指摘した。<sup>2</sup> オデッサ生まれのギリシア研究者プシハリス(仏語ではプシカリ)はこれを支持し、近代ギリシア文学に散見される<レノーレ譚>の源泉をセルビアの<レノーレ譚>的民間伝承に求める論考を発表した。<sup>3</sup>

一連の流れを受け、文芸学者ヴェセロフスキイは、近代ギリシアの<レノーレ譚>とセルビア、ブルガリア、アルバニア、南ロシアの<レノーレ譚>の類縁関係を見極めようとしたが、結論に際しては慎重な態度を維持した。<sup>4</sup> ヴェセロフスキイに続き、ペテルブルグ生まれのギリシア系ロシア人でロシア文学史家のデストゥニスも、近代ギリシアとスラヴの<レノーレ譚>の類縁性を立証しようとしたが、結局否定的な結論に至っている。<sup>5</sup>

これを受け、当時ワルシャワ大学で西欧文学を研究していたロシア人研究者ソゾノヴィチは、ドイツ、フランス、ギリシア、ロシアの先行研究に新たな採集資料と考察を加え、学位論文『スラヴおよびロシア詩に対する西欧の影響に関する問題について』を提出した。<sup>6</sup> 彼はヴェセロフスキイの研究を踏襲し、比較文学史的観点から<レノーレ譚>や<幽霊花婿譚>の筋をもつ大量の類

---

<sup>2</sup> Wilhelm Anton Wollner, "Der Lenorenstoff in der slavischen Volkspoesie." *Archiv für slavische Philologie*, 6, 1882, p.239-269. 引用はソゾノヴィチによる。

<sup>3</sup> Jean Psichari, *La Ballade de Lénore en Grèce*, Paris, 1884. 引用はソゾノヴィチによる。

<sup>4</sup> Веселовский А.Н. К народным мотивам баллады о Леноре. // Журнал Министерства народного просвещения. 1885. Ноябрь. С.71-79.

<sup>5</sup> Дестунис Г.С. Сказание о брате-мертвце или женихе-мертвце. // Журнал Министерства народного просвещения. 1886. Март. С.76-100.

<sup>6</sup> Созонович И.П. К вопросу о западном влиянии на славянскую и русскую поэзию. Варшава, 1898.

話を引用し、伝播説・相互影響説を唱えた。ただ、その中には北欧神話「ヘルギとシグルーンの物語」の起源を古代ギリシアの「プロテシラオスとラオダメイア神話」に求めるなどの大胆な仮説もあった。とはいえ、彼の労作は引用資料の豊富さにおいて比類なく、1世紀以上を経た現在もロシア・スラヴ地域における〈レノーレ譚〉研究の古典と見做され、この大著を超える研究はあらわれていない。<sup>7</sup>

ソゾノヴィチの研究を受け、同じワルシャワ大学で教鞭を執っていたロシア・ポーランド文化研究者ゼリンスキイは、〈レノーレ譚〉の「プロテシラオスとラオダメイア神話」起源説に焦点をあてた論文を発表した。<sup>8</sup> ゼリンスキイの論文は20世紀初頭のロシア象徴派詩人たちに靈感を与え、アンネンスキイやソログーブなどの作品に結実した。

ソヴィエト時代には、イエズイトヴァやヴァツローらが、ジュコーフスキイをはじめとするロマン派のバラッド詩やゴシック小説に関する研究のなかで〈レノーレ譚〉に言及したが、部分的な考察に留まっていた。<sup>9</sup> 近年、ドゥシェキナ、<sup>10</sup> カヌノヴァ、<sup>11</sup> パウトキン、<sup>12</sup> ドルギフの研究が続き、<sup>13</sup> ロシアにおける〈レノーレ譚〉の全貌が明らかになりつつある。<sup>14</sup> とくにドルギフ

<sup>7</sup> ただし、ソゾノヴィチには、資料収集の自己目的化という側面もあった。詳しくは以下を参照。ウラジーミル・プロップ（斉藤君子訳）『ロシア昔話』せりか書房、1986年、141-142頁。

<sup>8</sup> *Зелинский Ф.Ф.* Античная Ленора. // Из жизни идей. Петроград, 1916. С.247-272.

<sup>9</sup> *Иезуитова Р.В.* Баллада в эпоху романтизма. // Русский романтизм, Л., 1978. С.138-163.; *Вацуро В.Э.* Готический роман в России. М., 2002.

<sup>10</sup> *Душечкина Е.В.* Святочная словесность первой трети XIX века. // Русский святочный рассказ, СПб., 1995. С.84-134.

<sup>11</sup> *Канунова Ф.З.* Трансформация сюжетного мотива возвращения жениха-мертвеца за свою невестой в балладах В.А. Жуковского. // Интерпретация текста : Сюжет и мотив. Новосибирск, 2001. С.77-88.

<sup>12</sup> *Пауткин А.А.* По следам бюргеровой Лены. Пространство и время в балладах о мертвом женихе. // Вестник Московского университета. Сер. 9. Филология. 2007. 6. С.22-29.

<sup>13</sup> *Долгих Ю.А.* «Ходячие» мертвецы в русском страшном повествовании 1810-1840-х гг. // Все страхи мира : в литературе и искусстве : Сб. статей. СПб.-Тверь, 2015. С.84-99.

<sup>14</sup> コズロヴァは〈幽霊花婿譚〉の筋をインデックス化している。ただし、インデックス作成の際の材源がフォークロア資料に限定されているので、本稿の議論でとりあげることはしない。*Козлова Н.К.* Народные параллели литературных баллад на сюжет

の研究は、これまでヴァツォロの研究を除いてほとんど言及のなかった 19 世紀初頭のロシアにおける<レノーレ譚>の伝播について、アーカイブ資料に依拠しながら詳述したもので、この分野の研究の空白を大きく埋めるものとなっている。

本邦で最も早くロシア・スラヴ地域の<レノーレ譚>、<吸血鬼譚>に関する研究を発表したのは、栗原成郎である。栗原は、スラヴ世界の吸血鬼、夢魔、死神、人狼に関する信仰や伝説に関するフォークロア資料、およびこれらの民間伝承に材を得た近代の文学作品を丹念に渉猟し、『スラヴ吸血鬼伝説考』（1980年初版。1991年に増補新版、1995年に文庫版）において、「吸血鬼のバルカン・スラヴ起源説」を立証した。<sup>15</sup> この中で、文学的吸血鬼に先行する形象として、ビュルガーの『レノーレ』の幽霊花婿についても言及している。栗原は、その後もスラヴ世界における<レノーレ譚>の諸相について研究を続け、その成果を2度の講義・講演録として発表している。<sup>16</sup>

このほか、『エヴゲーニイ・オネーギン』におけるタチヤーナの夢に関連する<レノーレ譚>のモチーフを指摘したのは田辺佐保子である。<sup>17</sup> 田辺は、近年翻訳出版したソモフの妖怪譚に寄せた解説でも、19世紀初頭のロシアにおける『レノーレ』ブームについて言及している。<sup>18</sup>

執筆者は、スラヴ世界における<レノーレ譚>の源泉をたどった栗原の広汎かつ丹念な研究に想を得て、ロシアの<レノーレ譚>の文学的伝播を追跡してきた。これまで、ロシアにおけるビュルガーの『レノーレ』受容、ジュコーフ

---

«жених-мертвец». // Вестник Омского университета, 2012. 2. С.388-393.

<sup>15</sup> 栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社、1991年、224-227頁。

<sup>16</sup> 栗原成郎「死んだ花婿が花嫁を連れ去る話」『スラヴ学論叢』第2号、1997年、4-39頁。栗原成郎「西スラヴと南スラヴにおける“レノーレ”譚」、『西スラヴ学論集』第4号、2001年、7-23頁。前者には、ビュルガー『レノーレ』、ジュコーフスキイ『リュドミラ』、カテーニン『オリガ』の全訳が、後者にはミツケヴィチ『逃避行』の全訳、およびチェコ、スロヴァキア、クロアチア、ボスニア、ブルガリアのフォークロア資料の概要と解説がおさめられている。

<sup>17</sup> 田辺佐保子「<タチヤーナの夢>の文学的背景」『一橋論叢』第89巻第1号、1983年、40-58頁。

<sup>18</sup> ソモフ（田辺佐保子訳）『ソモフの妖怪物語』群像社、2011年、187-188頁。



スキイ、カテーニン、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、トゥルゲーネフの手になる〈レノーレ譚〉的作品群について調査・分析してきた。<sup>19</sup> 本稿では、これまで言及していない詩人・作家の〈レノーレ譚〉的作品群について検討する。

## 2. 文学的〈レノーレ譚〉：定義と分類

文学作品としての『レノーレ』はビュルガーの創作によるものだが、「死んだ花婿が花嫁を連れ去る」タイプの説話（AT365）はヨーロッパ各地の民間伝承に広く行き渡っており、これらはフォークロアの〈レノーレ譚〉と呼ぶことができる。

これに対し、ビュルガーの『レノーレ』により文学化された同テーマの作品群は、文学的〈レノーレ譚〉と規定することができる。本稿は、ロシアにおける文学的〈レノーレ譚〉（および〈幽霊花婿譚〉、〈吸血鬼譚〉）に該当する作品群を検討対象とする。

以下に、ビュルガーの『レノーレ』の梗概をふりかえり、モチーフを抽出しながら文学的〈レノーレ譚〉の定義を呈示する。そのうえで、ロシアの文学的〈レノーレ譚〉について、モチーフの組合せと起源に従って分類し、個々の作品がどの分類項に属すのかを示す。この手続きを経ることにより、ロシアの文学的〈レノーレ譚〉の独自性を明示的に叙述することが可能になると考えられる。

<sup>19</sup> 拙稿「ロシアにおける『レノーレ』受容」『文化と言語』第75号、2011年、137-172頁。拙稿「プーシキンと〈レノーレ譚〉」、『文化と言語』第76号、2012年、93-127頁。拙稿「レールモントフと〈レノーレ譚〉」、『文化と言語』第77号、2012年、63-90頁。拙稿「ゴーゴリと〈レノーレ譚〉」、『文化と言語』第78号、2013年、117-151頁。拙稿「トゥルゲーネフと〈レノーレ譚〉ーパロディ詩から幻想小説へー」、『文化と言語』第82号、2015年、153-186頁。

## 2-1. ビュルガー『レノーレ』(梗概)<sup>20</sup>

舞台はフリードリヒ2世治下、7年戦争(1756-1763)時代のドイツ。女主人公レノーレは、戦地に赴いた恋人ヴィルヘルムの帰還を待ちわびている。凱旋するプロイセン軍のなかに恋人の姿はなく、絶望したレノーレは母の懇願に背き神を呪詛する。その夜、レノーレのもとへ黒馬に乗った幽霊花婿が迎えにくる。花婿は道中しきりと「おお 亡者の馬のこの迅さ」、「お前も死人がこわいのか」と繰り返すが、レノーレは恋人の異変に気づかない。墓場に到着するや否や、花婿は骸骨へと変じ、花嫁は墓穴に呑み込まれる。煌々と輝く月光の下、神の全能と慈悲を謳う亡霊たちの輪舞が繰り返される。

## 2-2. 文学的<レノーレ譚>の定義

前項で述べた『レノーレ』の筋、先述したロシアや日本の先行研究を参照し、本稿でとりあつかう文学的<レノーレ譚>を以下のように定義する。すなわち、下記①～⑥のモチーフから構成される筋をたどる文学作品、および、下記①～⑥のモチーフが(部分的欠落を伴いながらも)中心的役割を果たす文学作品を文学的<レノーレ譚>とする。

### [文学的<レノーレ譚>のモチーフ]

- ① 開戦。恋人(夫婦)の別離。花婿(夫)は花嫁(妻)を残して戦地に赴く。
- ② 終戦。凱旋軍のなかに花婿の姿はなく、花嫁に戦死の報が届く。
- ③ 花嫁の悲嘆。
- ④ 幽霊花婿の帰還。真夜中に来訪し、遠方への即時出立を促す。

<sup>20</sup> 『レノーレ』のテキストは、以下を参照。Gottfried August Bürger, *Sämtliche Schriften*, Hildesheim, New York, Olms, 1970. 邦訳は以下を参照。井上正蔵訳(「ビュルガー管見と詩抄」、『成城法學教養論集』第4号1974年、38-54頁)、高山宏訳(「レノーラ」『夜の勝利 英国ゴシック詞華撰 I』国書刊行会、1984年、27-36頁)、栗原成郎訳(「死んだ花婿が花嫁を連れ去る話」6-14頁)、南條竹則訳(「レノーレ」『怪奇文学大山脈 I』東京創元社、2014年、47-56頁)。

- ⑤ 幽霊花婿と花嫁の超自然的騎行。彼方の新床（新居）への誘い。
- ⑥ 墓地への到着。幽霊花婿の骸骨への変貌。花嫁の死。

上述①～⑥のモチーフは<レノーレ譚>の筋を構成する個別のモチーフだが、むしろ各モチーフの詳細や組合せには、創作者の数だけ様々なヴァリエーションがありうる。たとえば、ビュルガーの『レノーレ』では、③のモチーフに神への呪詛と敬虔な母による懇願、⑥のモチーフに神罰によるレノーレの死という要素が付加される。これは、元々フォークロア的<レノーレ譚>にはなかったキリスト教的な教訓要素を、ビュルガーが独自の創意としてバラッド詩に導入した結果だと考えられる。ロシアの文学的<レノーレ譚>では、神罰による花嫁（妻）の死が描かれる頻度は低く、死後の愛が成就した結果として死が描かれることが多い。文学的<レノーレ譚>の筋を構成する各モチーフとその組合せについては、次節で詳しく見ることにする。

### 2-3. ロシアにおける文学的<レノーレ譚>の分類

ロシアの文学的<レノーレ譚>は、前項 2-2 で述べたモチーフ①～⑥の組合せと起源に従い、以下のように大別できる。<sup>21</sup>

<sup>21</sup> ここでは、単に文学的<レノーレ譚>のモチーフを利用したに過ぎない風刺作品は、考察の対象に含めない。19世紀中葉には、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』や『スヴェトラナ』を素材に多くの風刺パロディ詩が書かれた。たとえば、ドミトリエフ（Михаил Александрович Дмитриев, 1796-1866）の『ペテルブルグのリュドミーラ』（*Петербургская Людмила*）や『新スヴェトラナ』（*Новая Светлана*, 1840）は、同時代の論客（センコフスキイ、ボレヴォイ、ベリンスキイなど）への当擦りを意図して書かれた（ベリンスキイが幽霊花婿として登場する）。本稿では、文学的<レノーレ譚>のモチーフから構成される筋を重視して作品を分類するため、モチーフと筋がなんら有機的関係を持たない風刺作品は除外する。このほかの主な風刺作品には、たとえば以下のものがある。ヤズィコフ（Николай Михайлович Языков, 1803-1846）は、『4月21日』（*21 апреля*, 1824）で『リュドミーラ』をパロディ化しながら学生の酒宴を讚美した。ヴァーゼムスキイ（Петр Андреевич Вяземский, 1792-1878）の『ブラハとウィーン間の鉄道之夜に』（*Ночью на железной дороге между Прагою и Веною*, 1853）では、列車の長距離高速移動と『リュドミーラ』の超自然的騎行が対比され、科学的現実が幻想的昔話を凌駕するさまが揶揄される。

[ロシアにおける文学的<レノーレ譚>の分類]

- A. 純粋な文学的<レノーレ譚>
  - A1. 『レノーレ』の翻案・翻訳
  - A2. 文学的<レノーレ譚>の筋をたどる作品
  - A3. 文学的<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた作品
- B. 文学的<レノーレ譚>の変奏
  - B1. ジュコーフスキイ『リュドミーラ』の変奏
  - B2. ジュコーフスキイ『スヴェトラーナ』の変奏
  - B3. ルイス『勇者アロンゾと美しきイモジン』の変奏
  - B4. 「プロテシラオスとラオダメイア神話」起源の文学的<レノーレ譚>
- C. フォークロア起源の文学的<レノーレ譚>
  - C1. フォークロア的<幽霊花婿譚>起源の文学的<レノーレ譚>
  - C2. フォークロア的<吸血鬼譚>起源の文学的<レノーレ譚>

2-4. 分類項目別作品群

前項 2-3 で述べた分類に従い、ロシアの文学的<レノーレ譚>を以下のように特徴づけることができる。

2-4-1. A. 純粋な文学的<レノーレ譚>

A の純粋な文学的<レノーレ譚>とは、(A1)『レノーレ』の翻案・翻訳、(A2)文学的<レノーレ譚>のモチーフから構成される筋を忠実にたどる作品、(A3)文学的<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた作品を指す。

A1. 『レノーレ』の翻案・翻訳

A1 は、ビュルガーの『レノーレ』の直接的翻案・翻訳作品であり、従って、①～⑥の全モチーフから構成される筋を持つ<レノーレ譚>である。通常、

＜レノーレ譚＞的バラッド詩に特徴的な「月は明るく輝いている / おお 亡者の馬のこの迅さ / お前も死人がこわいのか」<sup>22</sup> というリフレインが効果的に繰り返される。

A1 に含まれる作品としては、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』、『スヴェトラーナ』、『レノーラ』、カテーニン『オリガ』があげられる。

## A2. 文学的＜レノーレ譚＞の筋をたどる作品

A2 は、ビュルガーの『レノーレ』の翻案・翻訳には該当せず、モチーフ①～⑥の大部分をとりいれながら、創作者の独自の創意により全く新しい作品に昇華させたものを指す。

ここには、ポゴレーリスキイ『イジードルとアニュータ』、ソモフ『鬼火』、エルショフ『シベリアのコサク』、イヴァーノフ『スコットランドのバラッド』などが含まれる。『イジードルとアニュータ』、『鬼火』では、男女の立場が逆転し、幽霊花嫁が花婿を彼岸に連れ去るという筋が採用されている。

## A3. 文学的＜レノーレ譚＞のモチーフを採りいれた作品

A3 は、モチーフ①～⑥を部分的に導入しながら、独創的作品として結実させたものを指す。

A3 の作品としては、コズロフ『騎手』、トゥルゲーネフ『コツ…コツ…コツ！…』、『クララ・ミリチ (死後)』、ペトルシェフスカヤ『ソコリニキの出来事』、『手』、『小さなアパートで』などが挙げられる。

## 2-4-2. B. 文学的＜レノーレ譚＞の変奏

B の文学的＜レノーレ譚＞の変奏とは、ビュルガーの『レノーレ』を本歌取りした作品をさらにパロディ化した作品群を指す (パロディのパロディ化)。

---

<sup>22</sup> 井上「ビュルガー管見と詩抄」48頁。

(B1) ジュコーフスキイ『リュドミーラ』の変奏、(B2) 『スヴェトラーナ』の変奏、(B3) ルイス『勇者アロンゾと美しきイモジン』の変奏、および (B4) 「プロテシラオスとラオダメシア神話」起源の文学的<レノーレ譚>が該当する。<sup>23</sup>

それぞれ、モチーフ①～⑥の導入は部分的なものに限られる。代わりに、新奇な要素やモチーフが付加され、継承される。たとえば B2 では、ジュコーフスキイが『スヴェトラーナ』で新たに採り入れた、クリスマス週間、占い、吹雪、馬櫓、墓地の礼拝堂に安置される死者といったロシア・フォークロアのモチーフが継承されている。あるいは B3 では、不実な花嫁、花婿の復讐、因縁の深い場に出現する花婿と花嫁の幽霊といったモチーフが付加されており、これらは後継の本歌取り作品群にも意識的に採りいれられ、模倣・改作が重ねられている。

## B1. ジュコーフスキイ『リュドミーラ』の変奏

B1 は、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』の変奏（改作、パロディ）を指し、ボーデ『ミラナ』、ゾトフ『リュドミーラ：3 幕の戯曲』、レーミゾフ『暗い夜』などが例として挙げられる。『暗い夜』は、『リュドミーラ』と昔話『イワン王子と灰色狼』を作者が独自に連結した作品である。

## B2. ジュコーフスキイ『スヴェトラーナ』の変奏

B2 は、ジュコーフスキイの『スヴェトラーナ』の変奏（改作、パロディ）を指すが、ここに含まれるのは、ベストゥージェフ＝マルリンスキイ『1824 年のカフカース鉱泉の夜』、ペトロフ『ウスラド』、プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』、『吹雪』、レールモンツフ『ロシアの歌』、トゥルゲーネフ『<sup>カゾフ</sup>拐かし』、ブリューソフ『防衛』などである。『ウスラド』は、『スヴェトラーナ』とルイスの『勇者アロンゾと美しきイモジン』を融合させた作品である。

---

<sup>23</sup> ヨーロッパの文学的<吸血鬼譚>（ビュルガーの『レノーレ』を創作の源泉とする）の変奏は、ここではとりあげない。各国文学と同様に、ロシア文学にもヨーロッパ世界の文学的<レノーレ譚>を起源とする<吸血鬼譚>的作品が多数存在するが、これについての考察は稿を改める。

### B3. ルイス『勇者アロンゾと美しきイモジン』の変奏

B3 は、ルイス (Matthew Gregory Lewis, 1775-1818) の『マンク』(*Ambrosio, or the Monk*, 1796) に挿入されたバラッド詩『勇者アロンゾと美しきイモジン』(*Alonzo the Brave and Fair Imogine*, 1796) の変奏 (改作、パロディ) であり、カーメネフによる『勇者アロンゾと美しきイモジン』の翻訳 (現存せず)、グラマチン『ウスラドとフセミーラ』、ベストウージェフ＝マルリンスキ『血には血を』、レールモントフ『客人 (若者がクラリーサを愛したのは…)』などが挙げられる。

### B4. 「プロテシラオスとラオダメシア神話」起源の文学的<レノーレ譚>

B4 には、「プロテシラオスとラオダメシア伝説」起源の文学的<レノーレ譚>が含まれる。これはいわば誤解の産物とでも呼ぶべき作品群で、ロシアの<レノーレ譚>の起源追究のプロセスでうみ落とされた。第1節で述べたように、19世紀末から20世紀初頭にかけて、<レノーレ譚>の南スラヴ起源説や古代ギリシア起源説がさかんに議論された。ソゾノヴィチが「プロテシラオスとラオダメシア神話」起源説を唱えると、ゼリンスキがこれに呼応し、自己の論文で個別テーマとして組上に載せた。これが象徴派詩人たちの想像力を大いに掻き立て、一連の戯曲や抒情詩として結実した。これは、<レノーレ譚>の本流から逸脱した作品群であるため、モチーフ①～⑥の導入はわずかだが、ロシアに特徴的な文学的<レノーレ譚>の一変種として、本稿の分類項に含めることとする。

B4 には、アンネンスキ『ラオダメシア』、ソログープ『賢い蜜蜂の賜物』、ブリューソフ『ラオダメシアの悲嘆』、『死せるプロテシラオス』などが含まれる。

### 2-4-3. C. フォークロア起源の文学的<レノーレ譚>

C のフォークロア起源の文学的<レノーレ譚>としては、(C1) <幽霊花婿譚>起源の文学的<レノーレ譚>、および (C2) <吸血鬼譚>起源の文学的<レノーレ譚>があげられる。

## C1. フォークロアの<幽霊花婿譚>起源の文学的<レノーレ譚>

C1 には、様々なロシア・フォークロアのモチーフが観察される。すなわち、生者の過剰な悲嘆により墓地での安らぎを奪われた死者の帰還（生者に対する愛情だけでなく、憤怒、復讐などの念を示す死者も多い）、墓穴で花嫁が幽霊花婿に手渡す身代わりの衣類や花嫁道具、墓地近辺の礼拝堂に安置された別の死者、幽霊花婿と別の死者との格闘、（死者の活動時間の終了を告げる）雄鶏の鳴き声などのモチーフである。

C1 には、カラムジン『シエラ・モレナ』、コズロフ『花嫁の夢』、プーシキン『花婿』、ゴーゴリ『ガンツ・キュヘリガルテン』、『イヴァン・クパーラの前夜』、『恐ろしき復讐』、レールモントフ『手紙』、『\*\*\*（臨終のときが...）』、『ヴァジム』、『悪魔』、『死者の愛』、トゥルゲーネフ『夢』、『恋の凱歌』、ヴィクトル・S\*\*\*[匿名作家]『赤の騎士』、レーミゾフ『吸血鬼』、『花嫁』、『臆病な女』、『優しい女』などが含まれる。たとえば、『イヴァン・クパーラの前夜』では彼岸から帰還する幽霊花婿が予言される。また、『恐ろしき復讐』では冥婚の歌が挿入され、『赤の騎士』では幽霊花婿の悪夢が描かれている。

## C2. フォークロアの<吸血鬼譚>起源の文学的<レノーレ譚>

C2 のフォークロアの<吸血鬼譚>起源の作品においては、しばしば吸血鬼や吸血魔女の形象が描かれる。モチーフ①～⑥の導入は部分的なものに留まる。

C2 には、ソモフ『キエフの魔女たち』、プーシキン『西スラヴ人たちの歌』、ゴーゴリ『五月の夜、または身投げした娘』、『ヴィイ』、レールモントフ『\*\*\*（その日が訪れ...）』、A.K.トルストイ『吸血鬼』、『吸血鬼一族』、フェート『狂女』、『秘密』、トゥルゲーネフ『まぼろし』、ソログープ『赤い唇の客』、ツヴェターエヴァ『若者』などが含まれる。

以上見てきたように、ロシアの文学的<レノーレ譚>は、(A) 純粋な（＝正統的）文学的<レノーレ譚>、(B) 文学的<レノーレ譚>の変奏（＝派生的<レノーレ譚>）、(C) フォークロア起源の文学的<レノーレ譚>の 3 タイプ



に分類することが可能だと考えられる。

### 3. ロシアにおける文学的<レノーレ譚>の諸相

ここまで、ロシア文学と<レノーレ譚>の関係をやや図式的に論じてきたが、ロシアにおける文学的<レノーレ譚>の全体像を描出するには、通時的な観察もまた不可欠だろう。以下に、18世紀から20世紀にかけてのロシアにおける文学的<レノーレ譚>の諸相を作家別に概観する。なお、作家の配列は、<レノーレ譚>的作品の発表年に準ずることとする。

#### 3-1. 18世紀末のロシア文学と<レノーレ譚>

18世紀末のロシアにおいて、ビュルガーの『レノーレ』は、ドイツ語や英語に通じた文学者たちによって熱心に読まれていた。この時期、ロシア・センチメンタリズムの旗手カラムジン、プレ・ロマンティズムの代表詩人カーメネフなどが<レノーレ譚>に連なる作品をのこしている。

##### 3-1-1. カラムジン<sup>24</sup>

カラムジン（Николай Михайлович Карамзин, 1766-1826）は、『シエラ・モレナ』（*Сиера-Моррена*, 1793）において、花婿の生還、花嫁による裏切り（新たな花婿との婚約）、生還した花婿の死（報復としての自殺）などのモチーフを採り入れた。<sup>25</sup> スペイン・アンダルシアの美女エリヴィアは、海難で婚約者アロンゾを喪う。やがて彼女は別の男性（語り手）と恋に落ち、二人は婚約する。結婚式当日、アロンゾが教会にあらわれ、不実な花嫁を恨みながら自殺する。結婚は破談となり、エリヴィアは修道院に入る（花婿・花嫁双方の破滅）。

<sup>24</sup> テキストは以下を参照。Карамзин Н.М. Избранные сочинения в двух томах. М.-Л., 1964.

<sup>25</sup> ヴェッソーロは「妻の結婚式に参列する夫」の筋を読みとる（*Вацуро*, С.97-101.）。このテーマに関してはソゾノヴィチの膨大なデータの蓄積がある（*Созонович*, С.261-565.）。

### 3-1-2. カーメネフ<sup>26</sup>

カーメネフ (Гавриил Петрович Каменев, 1772-1803) は、ルイスの『勇者アロンゾと美しきイモジン』をロシア語に翻訳したとされるが、作品は現存しない。<sup>27</sup> 詩人はルイス風バラッド詩の創作を模索し、のちに『グロムヴァル』(Громвал, 1802) を書いた。<sup>28</sup>

カーメネフのバラッド詩は同時代の読書界から一定の評価を得ながらも、ジャンルを確立させるほどのインパクトを持たず、次第に忘れ去られることとなった。ロシアでバラッド詩のジャンルが定着し発展するには、ジュコーフスキの登場を待たなければならなかった。<sup>29</sup>

### 3-2. 19世紀ロシア文学と<レノーレ譚><sup>30</sup>

19世紀初頭には、ビュルガーの『レノーレ』が相次いでロシア語に翻訳・翻案された。すなわち、ジュコーフスキの『リュドミーラ』、『スヴェトラーナ』、『レノーラ』、カテーニンの『オリガ』の4作品である。

19世紀前半は、ロシア文学における詩の時代から散文の時代への移行期とも重なり、ロシアの<レノーレ譚>は、バラッド詩、抒情詩、短篇、中篇など、さまざまな形式で書かれるようになった。

<sup>26</sup> テキストは以下を参照。Каменев Г.П. Громвал (Поэма). // Поэты-радищевцы. Л., 1979. С.464-473. Вауро, С.226.

<sup>28</sup> 『グロムヴァル』は、異界、古城、廃墟、深い森、嵐、亡霊、骸骨、棺などがふんだんに登場するゴシック・バラッド詩である。ヴァツローは、ルイスの『血まみれの尼僧』や『勇者アロンゾと美しきイモジン』と比している (Вауро, С.232-233.)。

<sup>29</sup> イェズイトヴァは、カラムジンの『ライサ』(Раиса, 1791) とカーメネフの『グロムヴァル』をロシア最初のバラッド詩と見做す。Незуйтова, С.140.

<sup>30</sup> ドルギフの指摘した 1810-1840 年代のロシア文学における<レノーレ譚>的作品のうち、以下の作品については原典の入手がかなわず未見だが、情報として引用しておく。ドルギフによると、以下の無名の詩人・作家たちの作品にも<レノーレ譚>の筋やモチーフが読みとられるとのことである。ザゴルスキ『リーザ』(花嫁は幽霊花婿との死を選ぶ)、クルグリコフ『幽霊』、テイロ『マリヴィナ』(オシアン詩と『レノーレ』の融合)、P.A.[匿名詩人]『エドウィンとクララ』、\*\*\*[匿名詩人]『誓い』(『リュドミーラ』と同じ筋、女主人公名も同じ、血まみれの幽霊花婿の形象が恐怖を煽る)、スコロドモフ『夢』(『スヴェトラーナ』のパロディ)、ソフィヤ・M\*[匿名作者]『幽霊花婿』(ロシアの<レノーレ譚>のパロディ) など。詳しくは以下を参照。Долгих, С.86-89.

3-2-1. ジュコーフスキイ<sup>31</sup>

ジュコーフスキイ (Василий Андреевич Жуковский, 1783-1852) の翻案詩『リュドミーラ』 (Людмила, 1808) は、モチーフや筋の新奇さにより読者のあいだで大反響を呼び、ロシアにバラッド詩を根づかせた記念碑的作品となった。舞台は 16 世紀リヴォニア戦争期のルーシ。ビュルガーの原詩との最大の相違は、花婿が「死神」ではなく死者として描かれることだが、この変更は翻案・翻訳の 3 作品をとおして貫かれる。詩人は『リュドミーラ』の成功に満足することなく、5 年後に『スヴェトラーナ』 (Светлана, 1808-1812 年執筆、1813 年発表) を発表した。クリスマス週間最終日のロシアを舞台に、フォークロアの要素がふんだんに採り入れられたロシア風バラッド詩は、前作よりもさらに熱狂的に迎えられた。『スヴェトラーナ』の発表から 19 年後、原詩に忠実な翻訳詩『レノーラ』 (Ленора, 1831) が発表された。原詩の形式や筋はほぼ全て踏襲されたが、ここでも「幽霊花婿＝死神」の形象は導入されなかった。詩人は「死者が彼岸から愛する者を迎えに来る」というヨーロッパ伝統のフォークロアの<レノーレ譚>の筋を維持しようとしたと考えられる。<sup>32</sup>

3-2-2. グラマチン<sup>33</sup>

グラマチン (Николай Федорович Грамматин, 1786-1827) は、バラッド詩『ウスラドとフセミーラ』 (Услад и Всемила, 1810) に『勇者アロンゾと美しきイモジン』の筋を採り入れた。副題には「古いロシアのバラッド (Старинная русская

<sup>31</sup> テキストは以下を参照。Жуковский В.А. Полное собрание сочинений и писем в 20 томах. М., 2008. ジュコーフスキイについて、詳しくは以下を参照。拙稿「ロシアにおける『レノーレ』受容」。

<sup>32</sup> 詩人による 1810 年の覚書きに「バラッド詩のために / パーシーの古謡拾遺集 / ドイツのバラッド詩 / シラー / ビュルガー (・・・)」とある。パーシー (Thomas Percy, 1729-1811) の『英国古謡拾遺集』 (Reliques of Ancient English Poetry, 1765) 所収の伝承バラッド『愛するウィリアムの亡霊』 (Sweet William's Ghost) は、ビュルガーの『レノーレ』に直接的インスピレーションを与えた作品とされている。ジュコーフスキイはロシア・バラッド詩の確立にあたって、英国の伝承バラッドとビュルガーのバラッド詩の双方を参照したと考えられる。

<sup>33</sup> テキストは以下を参照。Грамматин Н.Ф. Услад и Всемила // Поэты 1790-1810-х годов, Л., 1971, С.323-326.

баллада)とある。はるかりトアニアに赴く花婿に、花嫁は誓いの指輪を託すが、誓いは破られ花嫁は新たな花婿の元に嫁ぐ。披露宴の日、指輪を携えた幽霊花婿が姿をあらわし、裏切りの花嫁を墓場に連れ去る。

### 3-2-3. カテーニン<sup>34</sup>

ジュコフスキイの『スヴェトラナ』の大成功から3年後、カテーニン(Павел Александрович Катенин, 1792-1853)は、原詩の筋に忠実で、かつロシア的響きを最大限にとり込んだ『レノーレ』の翻案詩『オリガ』(Ольга, 1816)を発表した。<sup>35</sup> ジュコフスキイが全翻案・翻訳をとおして慎重に回避した「幽霊花婿=死神」の形象は、『オリガ』においては忠実に再現された。

### 3-2-4. コズロフ

コズロフ(Иван Иванович Козлов, 1779-1840)は、バラッド詩『花嫁の夢』(Сон невесты, 1824)、抒情詩『夜の騎手』(Ночной ездок, 1828)に<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた。さらに、バラッド詩『ウェイヴァリー』(Бeverлей, 1832)では、スコットの歴史小説の同名の主人公の名を借用しながら、独創的バラッド詩の完成を目指そうとした。副題には、「ウォルター・スコットのスコットランドのバラッドの自由な模倣(Шотландская баллада из Валтера Скотта. Вольное подражание)」と記されている。ただし、このバラッド詩は、恋敵の披露宴会場から花嫁を連れ去る花婿の筋をたどり、作品は純粹なくレノーレ譚>とは言えない。コズロフの『ウェイヴァリー』を<レノーレ譚>として完成させたのはイヴァーノフだが、それについては後述する。詩人は、プーシキンやジュコフスキイとも親交があり、多くのロマン派的バラッド詩や抒情詩をのこした。

<sup>34</sup> テキストは以下を参照。Катенин П.А. Избранные произведения. М., 1965. カテーニンについて、詳しくは以下を参照。拙稿「ロシアにおける『レノーレ』受容」。

<sup>35</sup> 『オリガ』に先行する作品として、『ナターシャ』(Наташа, 1814)がある。

3-2-5. ベストウージェフ＝マルリンスキイ<sup>36</sup>

ベストウージェフ＝マルリンスキイ（Александр Александрович Бестужев-Марлинский, 1797-1837）は、短篇『血には血を』（*Кровь за кровь*, 1825）、『1824年のカフカース鉱泉の夜』（*Вечер на Кавказских водах в 1824 году*, 1830）、『恐ろしき占い』（*Страшное гадание*, 1831）などに<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた。

『血には血を』では、婚礼の宴から亡夫が裏切りの花嫁を連れ去るさまが描かれるが、これは『勇者アロンゾと美しきイモジン』の筋をなぞったものだと考えられる。『1824年のカフカース鉱泉の夜』では、登場人物の語る恐怖譚のなかで、幽霊花嫁のエピソード、棺に横たわる死者（ジュコーフスキイ『スヴェトラーナ』への言及あり）などの描写がくりかえされる。<sup>37</sup> また、『恐ろしき占い』（1831）では、クリスマス週間の怪が描かれる。騎兵中隊に所属する語り手は、激昂して恋人の夫を斬殺する。悪魔の先導に従った恋人たちの馬車の行先は墓場だった。二人は墓穴に突き落とされ、土と雪の下で窒息するが、全ては恋の狂気を暗示する不吉な夢に帰される。この作品では、クリスマス週間、占い、猛吹雪、墓場、櫓での出立など、『スヴェトラーナ』を想起させるモチーフが繰り返し描かれる。マルリンスキイの<レノーレ譚>は、登場人物の残忍さや行為の残虐性が克明に描かれ、ゴシック的恐怖譚の側面が強調されたものとなっている。

3-2-6. プーシキン<sup>38</sup>

プーシキン（Александр Сергеевич Пушкин, 1799-1837）は、バラッド詩『花婿』（*Жених*, 1825）をはじめ、韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』（*Евгений*

<sup>36</sup> テキストは以下を参照。Бестужев-Марлинский А.А. Собрание сочинений в двух томах. М., 1981. 邦訳は『恐ろしき占い』のみ。ベストウージェフ＝マルリンスキイ（金沢美知子訳）『恐ろしき占い』（『ロシア神秘小説集』所収）国書刊行会、1984年、191-238頁。

<sup>37</sup> ヴェツェーロはルイスの『血まみれの尼僧』、アーヴィングの『おじの冒険』の影響を見る（Вацуро, С.385-389.）。

<sup>38</sup> テキストは以下を参照。Пушкин А.С. Полное собрание сочинений в 17 томах. М., 1937-1959. プーシキンについて、詳しくは以下を参照。拙稿「プーシキンと<レノーレ譚>」。

*Онегин*, 1823-1831年執筆)の第3章(1827)、第5章(1828)、第8章(1832)、短篇『吹雪』(*Метель*, 1831)、『西スラヴ人たちの歌』(*Песни западных славян*, 1834)などに<レノーレ譚>や<吸血鬼譚>のモチーフを採り入れた。

『花婿』の女主人公は危険回避に成功したいわば生還した花嫁だが、馬櫓の花婿の登場は、「花嫁を迎えに来る馬上の花婿」のモチーフをなぞるものと言える。また、『オネーギン』では、第3章5連(タチヤーナと妹オリガの比較)、第5章エピグラフ(『スヴェトラーナ』の引用)、第5章10連(皿下の占いの食卓の準備)、タチヤーナの夢、第8章4連(詩人自身の独白におけるミュージックとレノーレの比較)などにおいて、『スヴェトラーナ』や<レノーレ譚>のモチーフがちりばめられている。さらに、『吹雪』のエピグラフには『スヴェトラーナ』の詩行が掲げられ、物語の筋を予示するものとなっている。マリヤの恋人ヴラジーミルはナポレオン戦争で戦死し、死せる花婿となる。そして、戦地から負傷兵ブルミン大佐の姿をとり(ヴラジーミルとブルミンは相補的・分身的存在と見做しうる)、花嫁たるマリヤの元に帰還する。このほか、『西スラヴ人たちの歌』所収の『ガイドック・フリジチ』、『マルコ・ヤクボヴィチ』、『吸血鬼』の3篇に、フォークロア的<吸血鬼譚>のモチーフが採りいられている。

### 3-2-7. ゴーゴリ<sup>39</sup>

ゴーゴリ(Николай Васильевич Гоголь, 1809-1852)は、田園抒情詩『ガンツ・キュヘリガルテン』(*Ганц Кюхельгартен*, 1827年執筆、1829年発表)、中篇『イヴァン・クパーラの前夜』(*Вечер накануне Ивана Купала*, 1830)、『五月の夜、または身投げした娘』(*Майская ночь, или Утопленница*, 1829-1830年執筆、1831年発表)、『クリスマスの前夜』(*Ночь перед Рождеством*, 1832)、『恐ろしき復讐』(*Страшная месть*, 1831年執筆、1832年発表)、『ヴィイ』(*Вий*, 1835)などにおいて、<レノーレ譚>や<吸血鬼譚>のモチーフを採り入れた。

<sup>39</sup> テキストは以下を参照。Гоголь Н.В. Полное собрание сочинений в 14 томах. М.-Л., 1937-1952. ゴーゴリについて、詳しくは以下を参照。拙稿「ゴーゴリと<レノーレ譚>」。

『ガンツ・キュヘリガルテン』で主人公の出立直後に恋人ルーザが見る死者の幻影は、ガンツの旅が死出の旅である印象を強めるものとなっている。また、『イヴァン・クパーラの前夜』では、孤児ペトロとコサックの娘ピドールカのやりとりの中に幽霊花婿と花嫁の姿が暗示される。『五月の夜、または身投げした娘』では、ルサルカのエピソードに＜吸血鬼譚＞のモチーフが挿入されている。『クリスマスの前夜』は一見幸福な結末を迎えるが、ここでもやはり＜レノーレ譚＞のモチーフが観察され、主人公ヴァクーラはペテルブルグから幽霊花婿として帰還したと解釈される。『恐ろしき復讐』は随所にゴシック小説的モチーフ（殺人、亡霊、魔術、呪い、近親相姦など）がちりばめられた作品だが、狂気のカテリーナが唄う錯綜した歌詞に、幽霊花婿と花嫁の冥婚のモチーフが織り込まれている。このほか、『ヴィイ』では、神学校生ホマーと吸血魔女の攻防が描かれる。吸血魔女は3日3晩ホマーを探し求め、棺に乗って教会堂内を縦横に旋回し、ヴィイの眼力をかりて生者を彼岸に連れ去る。

### 3-2-8. ポゴレーリスキイ<sup>40</sup>

ポゴレーリスキイ (Антоний Погорельский, 1787-1836) は、連作幻想小説『分身、あるいはわが小ロシアの夕べ』(*Двойник, или мои вечера в Малороссии*, 1828)の第二話に、＜レノーレ譚＞的物語「イジドルとアニュータ」(*Издор и Анюта*)を挿入した。本作ではナポレオン戦争に引き裂かれる恋人たちが描かれるが、従軍した花婿は無事生還し、残された花嫁が戦火のモスクワで死亡する。花婿は幽霊花嫁との逢瀬を重ね、やがて彼岸へと連れ去られる。作家は『レノーレ』の女主人公と幽霊花婿の立場を逆転させ、独自の＜レノーレ譚＞を描き出した。

<sup>40</sup> テキストは以下を参照。Погорельский Антоний. Избранное. М., 1985. 邦訳は以下のとおり。ポゴレーリスキイ (栗原成郎訳)『分身 あるいはわが小ロシアの夕べ』群像社、2013年。

### 3-2-9. ペトロフ<sup>41</sup>

ペトロフ (Иван Матвеевич Петров, 1803-1838) は、バラッド詩『ウ斯拉ド』(Услад, 1828) に<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた。幽霊花婿ウ斯拉ドは、新しい花婿に嫁いだ不実な花嫁を墓場から迎えにくる。新しい花婿の束縛に辟易していた花嫁は、ウ斯拉ドとの騎行に同意する。裏切りの花嫁が到着した小屋にはウ斯拉ドの亡骸が安置され、司祭が祈祷を朗唱していた。それ以降、血まみれの幽霊花婿ウ斯拉ドが復讐のために不実な花嫁につきまとうことになる。この作品には、『スヴェトラナ』に描かれた「死者の亡骸を安置する小屋」と『勇者アロンゾと美しきイモジン』における復讐の幽霊花婿のモチーフが織り込まれている。

### 3-2-10. レールモントフ<sup>42</sup>

レールモントフ (Михаил Юрьевич Лермонтов, 1814-1841) は、抒情詩『手紙』(Письмо, 1829)、『\*\*\* (臨終のときが...)』(\*\*\*«Когда последнее мгновенье...», 1830)、『\*\*\* (その日が訪れ...)』(\*\*\*«Настанет день...», 1830)、『ロシアの歌』(Русская песня, 1830)、バラッド詩『客人』(Гость, 1831)、長篇歴史小説『ヴァジム』第9章(Вадим, Глава XI, 1833-34)、抒情詩『死者の愛』(Любовь мертвеца, 1840)、長篇叙事詩『悪魔』第1部10-14章(Демон, Часть I, X-XIV, 1829-1839)などに<レノーレ譚>のモチーフを採り入れた。

抒情詩『手紙』、『\*\*\* (臨終のときが...)』、『\*\*\* (その日が訪れ...)』はいずれも「死後の愛」をテーマとしており、墓場からの愛をうたったという点で<レノーレ譚>の系譜に位置づけることができる。また、『ロシアの歌』では、幽霊花婿が不実な花嫁の元に婚約指輪を携えてあらわれるさまが予示される。

<sup>41</sup> テキストは以下を参照。Петров И.М. Услад (Баллада) // Енисейский альманах на 1828 г. Красноярск. С. 91-93. 主人公の名ウ斯拉ドは、ジュコーフスキイの短篇『マリヤの林』(Марьяна роца, 1809) から借用されたものと推察される。

<sup>42</sup> テキストは以下を参照。Лермонтов М.Ю. Полное собрание сочинений в 10 томах. М., 1999-. レールモントフについて、詳しくは以下を参照。拙稿「レールモントフと<レノーレ譚>」。



随所に『スヴェトラーナ』やプーシキンの『花婿』からの引用が見られ（吹雪、柩、司祭、板葺き門、指輪のモチーフの挿入）、作品のパロディ性が前景化されている。このほか、『客人』には『勇者アロンゾと美しきイモジン』の筋が導入され、『ヴァジム』には挿話形式の〈レノーレ譚〉的モチーフが盛り込まれている。さらに、『死者の愛』の幽霊花婿は、恋人の不実を予見し、嫉妬に煩悶し、花嫁を威嚇する。『悪魔』の花婿は、花嫁タマーラの元に赴く道中で盗賊に襲撃される。死にゆく花婿は馬上の旅を続け、花嫁の元にたどり着く（悪魔と花婿は分身的存在だと考えられる）。

### 3-2-11. ゾトフ<sup>43</sup>

ゾトフ（Зотов Рафаил Михайлович, 1795-1871）は、ナポレオン戦争（祖国戦争）における自己の従軍経験を多くの歴史小説や戯曲に反映させた。『リュドミーラ：3幕の戯曲』（*Людмила: драма в трех отделениях*, 1830）には、「[本作は] ドイツの『レノーレ』の模倣であり、ジュコーフスキイ氏の詩行を数行採り入れたバラッド詩から成る」と但し書きが添えられている。戯曲は第1幕「祖国戦争」（*Отечественная война*）、第2幕「裏切り」（*Измена*）、第3幕「幽霊花婿」（*Жених-мертвец*）から成り、ナポレオン戦争で戦死した幽霊花婿の帰還が描かれている。

### 3-2-12. ソモフ<sup>44</sup>

ソモフ（Орест Михайлович Сомов, 1793-1833）は、小品『鬼火』（*Бродящий огонь*, 1832）や短篇『キエフの魔女たち』（*Киевские ведьмы*, 1833）などに、〈レノーレ譚〉や〈吸血鬼譚〉の筋を採り入れた。

『鬼火』では、カフカースの戦闘からキエフに帰還した豪傑ヴェレシルが死

<sup>43</sup> ゾトフの戯曲の原典を入手できず作品は未読であるが、戯曲の内容については『モスクワ・テレグラフ』誌に掲載された書評を参照した。Московский телеграф, М., 1830. часть 34. С.86.

<sup>44</sup> テキストは以下を参照。Сомов О.М. Киевские ведьмы. // Русская фантастическая повесть эпохи романтизма. М., 1987. С.86-98. 邦訳には田辺訳『ソモフの妖怪物語』がある。

後間もない許嫁ミラヴァによって彼岸に連れ去られるさまが描かれる。ポゴレーリスキイの『イジードルとアニュータ』同様、幽霊花嫁が花婿を彼岸に連れ去る筋が適用され、男女の立場が逆転している。また、『キエフの魔女たち』では、主人公フォードルの妻カトルーシャが吸血魔女として描かれる。キエフ郊外の禿山での魔物たちのサバトを覗いてしまったフォードルは、妻に生き血を吸われて死ぬこととなる。この作品には、フォークロア的<吸血鬼譚>のモチーフが導入されている。ソモフは1821年にバイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の『小説の断章』 (*Fragment of a Novel*, 1816) の翻訳出版を試みており (検閲により出版されず)、<吸血鬼譚>への関心がとくに高かったとみられる。<sup>45</sup>

### 3-2-13. ボーデ<sup>46</sup>

ボーデ (Александр Карлович Бодэ, 1790-1861) のバラッド詩『ミラナ』 (*Милана*, 1834) は、「ビュルガー『レノーレ』の自由訳」との副題が添えられたが、序文で「ジュコーフスキイの『リュドミーラ』に感化されて翻訳を試みた」と述べられているとおり、『リュドミーラ』の変奏となっている。ビュルガーの原詩で多用されたオノマトペの導入が試みられたが、あまり成功しているとは言えない。また、ビュルガーの自由訳であるとうたいながら、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』の創意 (リヴォニア戦争という時代設定、女主人公の名など) をそのまま借用するなど、中途半端な引用も目立ち、作品は同時代の文壇でほとんど評価されないままに忘れ去られてしまった。

### 3-2-14. エルショフ<sup>47</sup>

エルショフ (Петр Павлович Ершов, 1815-1869) は、バラッド詩『シベリアのコサック』 (*Сибирский казак*, 1835) において、敵対するキルギス人との戦い [エ

<sup>45</sup> ソモフと<吸血鬼譚>の関係については以下を参照。Вауро, С.477-512.

<sup>46</sup> テキストは以下を参照。Александр Б. Милана. Русская баллада или старые погудки на новый лад. СПб., 1834.

<sup>47</sup> テキストは以下を参照。Ершов П.П. Конек-горбунок. Стихотворения. Л., 1976.

ニセイ・キルギスとの戦闘か]に赴くコサック兵士の姿を<レノーレ譚>にうたいあげた。副題には「古い実話 (Старинная быль)」とある。出征前夜、夫は戦死しても必ず妻を迎えに戻ると誓い、戦地に赴く。凱旋したコサック軍の隊列に夫の姿はなく、指輪と共に夫の戦死が通知される。その晩、打ちひしがれ悪夢に苛まれる未亡人の元に、変わり果てた様子(全身血まみれ、落ちくぼんだ両眼、むきだしの骨)の夫が幽霊花婿となって帰還する。死者とその妻は6日間の超自然的騎行の末に墓地に到着するが、妻は荒涼たるステップにひとり取り残され、灼熱のなか孤独に死んでいく。

### 3-2-15. ヴィクトル・S\*\*\*[匿名作家]<sup>48</sup>

ヴィクトル・S\*\*\* (Виктор С\*\*\*, 生没年不詳)の短篇『赤の騎士』(Красный всадник, 1837)では、攫われた花嫁が見る悪夢の中に<幽霊花婿譚>のモチーフがわずかに描かれる。花婿には「赤の騎士」の形象が投影され、作品全体を残忍な掠奪者による恐怖と暴力の雰囲気覆う。

### 3-2-16. A. K. トルストイ<sup>49</sup>

A.K.トルストイ (Алексей Константинович Толстой, 1817-1875)は、中篇『吸血鬼一族』(Семья вурдалака, 1839)と『吸血鬼』(Упырь, 1841)に、<レノーレ譚>的バラッド詩を挿入した。

『吸血鬼一族』には、スラヴの吸血鬼俗信、カルメの吸血鬼論考などが本文

<sup>48</sup> Виктор С\*\*\*. Красный всадник. Быль XVII века. // Библиотека для чтения. т.20. СПб., 1837. С.39-56.

<sup>49</sup> テキストは以下を参照。Толстой А.К. Собрание сочинений в 4-х томах. М., 1964. 邦訳は以下のとおり。A.K.トルストイ(栗原成郎訳)『吸血鬼<sup>ウ・フ・イ・リ</sup>』(『ロシア神秘小説集』所収)国書刊行会、1984年、9-113頁。A.K.トルストイ(栗原成郎訳)『吸血鬼<sup>ウルダラク</sup>の家族』(『ロシア神秘小説集』所収)国書刊行会、1984年、115-157頁。このほか、A.K.トルストイは、コジマ・プルトコフの筆名(従兄弟のジェムチューニコフ兄弟と共同)で<レノーレ譚>のパロディ・バラッド詩『遍歴者』(Путник, 1854)も書いている。バラッド詩では、内心に秘密を抱えた誇り高く寡黙な遍歴者が、雪原で落馬し自滅する様子が描かれる。『リュドミーラ』と同じ4脚ヤンプが用いられ、文学的<レノーレ譚>における超自然的騎行が揶揄されている。

に織り込まれている。語り手の恋人ズデンカが口ずさむ死後の愛の歌には、幽霊花婿と不実な花嫁の形象が反映されている。吸血鬼と化した一家の悲劇は壮絶で凄惨だが、末尾における侯爵との死闘はゴーゴリの『ヴィイ』を想起させ、すさまじくも若干コミカルなものとなっている。また、『吸血鬼』には、極端に複雑な筋や入れ子型の構成が観察され、名門家の血塗られた歴史、姦通、殺人、呪い、幽霊の棲む館、肖像画、幽霊花嫁、狂気、吸血鬼、稿本など、随所にゴシック的モチーフがちりばめられている。一族の呪いの発端が記されたバラッド詩『鷺木菟が蝙蝠わしみみずく こうもりを捉え…』には、ビュルガーやルイスなどのゴシック・バラッド詩の影響が強く感じられる。

### 3-2-17. フェート<sup>50</sup>

フェート(Афанасий Афанасьевич Фет, 1820-1892)は、抒情詩『狂女』(*Безумная*, 1840)とバラッド詩『秘密』(*Тайна*, 1842)に、それぞれ<レノーレ譚>と<吸血鬼譚>のモチーフを織りこんだ。『狂女』には、死んだ花婿とともに墓石の下で眠ることを熱望する花嫁の姿が描かれ、<レノーレ譚>と<吸血鬼譚>の両方のモチーフが付加されている。また、『秘密』においては、<吸血鬼譚>のモチーフが採りいれられている。

### 3-2-18. トウルゲーネフ<sup>51</sup>

トウルゲーネフ(Иван Сергеевич Тургенев, 1818-1883)は、バラッド詩『拐かし』(*Похищение*, 1842)、中篇『まぼろし』(*Призраки*, 1855-1863年執筆、1864年発表)、短篇『コツ...コツ...コツ!...』(*Стук... стук... стук !..*, 1870年執筆、1871年発表)、中篇『夢』(*Сон*, 1875-1876年執筆、1877年発表)、『恋の凱歌』(*Песнь торжествующей любви*, 1879-1881年執筆、1881年発表)、『クララ・ミ

<sup>50</sup> テキストは以下を参照。Фет А.А. Сочинения и письма в двадцати томах. СПб., 2002-。『秘密』には邦訳がある。フェート(中島とみ子訳)『秘密』(『ロシアソビエト文学全集35 ロシア詩集』所収)平凡社、1966年、135-136頁。

<sup>51</sup> テキストは以下を参照。Тургенев И.С. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. М., 1978-トウルゲーネフについて、詳しくは以下を参照。拙稿「トウルゲーネフと<レノーレ譚>—パロディ詩から幻想小説へ—」。

リチ（死後）』（*Клара Милич (После смерти)*, 1882年執筆、1883年発表）などに、<レノーレ譚>や<吸血鬼譚>のモチーフを採り入れた。

『まぼろし』では、エリスの正体（吸血鬼）が再三示唆され、語り手は最終的に健康を害し、極度の貧血、不眠、咳に悩まされるようになる。『夢』の実父（＝幽霊花婿）は、少年の母に一方的想いを寄せ、彼岸に連れ去ろうと再三試みる。『恋の凱歌』の幽霊花婿ムーツイは、魔力で人妻ワレリヤを獲得しようと企図するが、夫ファービイに刺殺される。『クララ・ミリチ』では、アラートフと自殺した女優（＝幽霊花嫁）による死後の愛が描かれる。夢とも現ともつかない、クララとの「死後の愛」を育んだ主人公は、次第に衰弱して死んでいく。

### 3-3. 20世紀ロシア文学と<レノーレ譚><sup>52</sup>

死者が愛する者を墓場から迎えに来る物語は、19世紀、20世紀を経て、現代まで書き継がれてきた。20世紀ロシア文学において、恐怖物語は、時に胸をうつ感動物語へと書き換えられ、あるいは更に残酷なホラーストーリーへと進化し、また時にはパロディ化されたナンセンス滑稽譚へと変貌を遂げながら、ますます複雑化・多様化を続けている。

#### 3-3-1. ソログープ<sup>53</sup>

ソログープ（Федор Кузьмич Сологуб, 1863-1927）は、抒情詩『\*\*\*（エリサヴェータ、エリサヴェータ...）』（\*\*\* «*Елисавета, Елисавета...*», 1902）において、

<sup>52</sup> このほか、グミリョフ（Николай Степанович Гумилев, 1886-1921）の『迷走した路面電車』（*Заблудившийся трамвай*, 1919）などに<レノーレ譚>の筋を読みとる研究もある（*Чижикова А.А. Сюжет о мертвой невесте в поэзии А.Ахматовой. // Вестник Удмуртского университета. 2011. С.40-46.*）。また、テッフィ（Надежда Александровна Тэффи, 1872-1952）の『恐怖の跳躍』（*Страшный прыжок*, 1910）では、失恋して自殺を図る女主人公（サーカスの女性綱渡り師）が「レノーレ（Ленора）」と名付けられている。テッフィには、フォークロア的<吸血鬼譚>の作品もある。

<sup>53</sup> テキストは以下を参照。*Сологуб Ф.К. Собрание сочинений в шести томах. М., 2000.* 邦訳は以下のとおり。ソログープ（中島とみ子訳）『エリサベータ』（『ロシアソビエト文学全集 35 ロシア詩集』所収）平凡社、1966年、216-217頁。

死んだ花嫁との死後の愛を切望する花婿の姿を描いている。また、「プロテシラオスとラオダメイア神話」に取材した戯曲『賢い蜜蜂の賜物』(Дар мудрых пчел, 1907) を発表した。戯曲には「5幕の悲劇」という副題が添えられ、序文には「ゼリンスキイの論文『古代ギリシア・ローマのレノーレ』を契機に、この悲劇を書こうと思い立った」と記されている。このほか、短篇『赤い唇の客』(Красногубая гостья, 1912) では、主人公ワルゴリスキイが吸血魔女リーリットに魅せられ、生命の危機に瀕するさまが描かれる。<sup>54</sup> リーリットは愛を囁きながら、吸血行為を懇願する。主人公は死の危機に晒されるが、クリスマス週間の奇跡的力の介入により救われる。ソログープの描く吸血魔女はモダンでスタイリッシュな存在であり、ソモフ、プーシキン、ゴゴリの描くフォークロアの吸血鬼とは明らかに一線を画す。これは、ロシアの吸血鬼がフォークロアの土俗的形象から、ロマン派が創造した貴族的な文学的吸血鬼像を経て、現代的で都会的な吸血鬼へと変貌していく過程を示す一例だと考えられる。

### 3-3-2. ブリュースフ<sup>55</sup>

ブリュースフ(Валерий Яковлевич Брюсов, 1873-1924)の短篇『防衛』(Защита, 1904)は、亡夫が死後も妻を守り続ける物語で、「クリスマス物語(Святочный рассказ)」との副題が添えられている。クリスマス週間のこと、語り手はある大佐から興味深い話を聞く。1870年代半ば、未亡人エレーナに思いを寄せていた大佐は、猛吹雪の晩、彼女の屋敷を訪ねる。恋心を打ち明けた大佐に、彼女は今でも亡夫を愛しており亡霊＝幽霊花婿と暮らしているのだと言う。失意の大佐は亡夫の衣服を身につけ、故人になりすます。大佐が寝室で未亡人とどきかかった瞬間、幽霊花婿が妻を守るために墓場から駆けつける。本作には、クリスマス週間、猛吹雪、幽霊花婿などのモチーフが採りいれられており、『スヴェトラーナ』の変奏と見做すことができるだろう。このほか、ブリュースフ

<sup>54</sup> 邦訳は以下のとおり。フォードル・ソログープ(佐々木彰訳)『赤い唇の客』(『現代ロシア幻想小説』所収)白水社、1971年、16-30頁。

<sup>55</sup> テキストは以下を参照。Брюсов В.Я. Собрание сочинений в семи томах. М., 1973. 邦訳は以下のとおり。ブリュースフ(草鹿外吉訳)『防衛ークリスマスの物語』(『ロシア怪談集』所収)河出書房新社、1990年、341-354頁。

は「プロテシラオスとラオダメイア神話」を題材に、抒情詩『ラオダメイアの悲嘆』（*Плач Лаодамии*, 1906）、および、戯曲『死せるプロテシラオス』（*Протесилай умерший*, 1913）を書いている。

### 3-3-3. アンネンスキイ<sup>56</sup>

アンネンスキイ（Иннокентий Фёдорович Анненский, 1855-1909）は、劇詩『ラオダメイア』（*Лаодамия*, 1902年執筆、1906年発表、4幕）において、「プロテシラオスとラオダメイア神話」起源の文学的<レノーレ譚>を描出した。アンネンスキイは、序文でラオダメイアを「テッサリア [プロテシラオスはテッサリアの王] のレノーレ（フェッサイイская Ленора）」と呼びながら、創作の動機を明らかにしている。

### 3-3-4. レーミゾフ<sup>57</sup>

レーミゾフ（Алексей Михайлович Ремизов, 1877-1959）は、ロシアの伝統的昔話を改作した童話集『お日様を追って』（*Посолонь*, 1907）所収の『暗い夜』（*Ночь темная*, 1907）において、昔話と<レノーレ譚>の融合を試みた。<sup>58</sup> 本作では、イワン王子が幽霊花婿として描かれ、「蒼褪めた月が死せる王子を照らす」というフレーズがくりかえされる。王子が従える灰色狼は、生命の水とともに銀の湖底に沈んで久しい。数年の不在のあと、死んだと噂されていた幽霊王子が帰還し、花嫁コプチューシカ王女との披露宴が執り行なわれる。宴には魍魎魍魎が参列する。まもなく、幽霊王子は花嫁を馬に乗せて出発する。道中、「夜は暗く 馬は黒ずむ / ねえ君 僕が怖くはないのかい？ / いいえ 怖くありませんわ」という<レノーレ譚>のリフレインが度々挿入される。墓場へ

<sup>56</sup> テキストは以下を参照。アンネンский И. Ф. Стихотворения и трагедии. Л., 1990.

<sup>57</sup> テキストは以下を参照。Ремизов А. М. Собрание сочинений в десяти томах. М., 2000.

<sup>58</sup> レーミゾフの自註は以下のとおり。「このイワン王子とコプチューシカ王女のおとぎ話で描かれるのは、生ける死者のモチーフである。このモチーフは古典古代のプロテシラオスとラオダメイア伝説に起源をもつ、極めて古いモチーフである。ロシア文学においては、ビュルガーの『レノーレ』を通じ、ジュコーフスキイの『リュドミラ』で描かれた。最近ではフォードル・ソログープが悲劇『賢い蜜蜂の贈物』の中でこのモチーフを再現している」

の騎行が予感されるなか、物語は唐突に断ち切られる。末尾はリフレインを遮るように「ガブッ!!! [幽霊花婿は花嫁を] 食べてしまった。」と結ばれている。作者の自註では、「このフレーズは、実際に聴衆が恐怖に震撼するよう朗読されなければならない。そのため、直前のフレーズから心の準備をして、一呼吸置いてすぐに「ガブッ!!!」と行かなければならない。」と記され、ナンセンスなパロディであることが強調される。

また、同じ童話集所収の昔話『吸血鬼』(Упырь, 1909)では、幽霊花婿コストルブ王子(царевич Коструб [骨切断王子])と花嫁チューチュエルカ王女(царевна Чучелка [剥製王女])の死後の愛が描かれる。冒頭から半ばにかけては、旅先での花婿の急死、幽霊花婿の帰還、墓場への超自然的騎行、王女の身代わりに墓穴に投げ込まれる衣服、別の死者の安置された小屋への避難、幽霊花婿を援助する死者(小屋の扉を開ける)、死者たちのひしめく小屋など、フォークロア的<幽霊花婿譚>のモチーフが次々に示される。結末部で、幽霊花婿は死後の愛を誓い、口づけとともに花嫁の生き血を飲み干す。これは<吸血鬼譚>のモチーフの挿入だと考えられるが、プーシキンが『エヴゲーニイ・オネーギン』のタチヤーナの夢において描いた、魑魅魍魎の首領=吸血鬼オネーギンを想起させるものとなっている(オネーギンはタチヤーナの首元に唇を寄せようとする)。昔話の冒頭と末尾では、猛吹雪のすさまじさがあからさまに強調され、ジュコーフスキイの『スヴェトラーナ』、プーシキンの『オネーギン』、『吹雪』を連想させるものとなっている。

このほか、連作短篇集『ロシアの女性たち』(Русские женщины, 1909-1912)所収の『花嫁』(Суженая, 1911)、『臆病な女』(Робкая, 1911)、『心優しい女』(Сердечная, 1912)においても、前者では幽霊花嫁、後者2作品では幽霊花婿が描かれる。<sup>59</sup>

<sup>59</sup> レーミゾフにはこのほか、死んだ夫と暮らす家族を描いた『犠牲』(Жертва, 1909)という短篇もある。ゴシック・ホラーを思わせるクリスマス物語である。邦訳は、レーミゾフ(原卓也訳)『犠牲』(『ロシア短篇24』所収)集英社、1971年、180-195頁。



3-3-5. ブローク<sup>60</sup>

ブローク (Александр Александрович Блок, 1880-1921) は、抒情詩『あの世で』(3a гробом, 1908)、詩集『恐ろしい世界』(Страшный мир, 1909-1916) 所収の『地獄の歌』(Песнь Ада, 1909)、および『暗黒の血』(Черная кровь, 1910-1914) において、<レノーレ譚>、<吸血鬼譚>のモチーフを導入した。<sup>61</sup>

抒情詩『あの世で』では、流神の言辞で時代の寵児となった花婿の葬儀に参列する花嫁の姿が描かれる。花婿の近親者や通りすがりの弔問者が忙しなく行き交う中、花嫁が別の花婿 (Иной Жених [大文字の「花婿」とはイエス・キリストのことか]) を待ちわびる様が揶揄されるが、表題が死後の愛を示唆しているとの解釈も可能である。

抒情詩『地獄の歌』、および連作詩『暗黒の血』においては、恋人の生き血を吸う死者=吸血鬼が描かれている。

3-3-6. イヴァーノフ<sup>62</sup>

イヴァーノフ (Георгий Владимирович Иванов, 1894-1958) は、バラッド詩『スコットランドのバラッド』(Шотландская баллада, 1916) に<レノーレ譚>のモチーフ (花婿の死、幽霊花婿の帰還、墓場への超自然的騎行) を採り入れた。<sup>63</sup> 先述のとおり、イヴァーノフのバラッド詩は、コズロフの『ウエイヴァリー』を大胆に改作したものだと考えられる。コズロフのバラッド詩に死者は登場しなかったが、イヴァーノフは主人公ウエイヴァリーを幽霊花婿として描いた。<レノーレ譚>の筋が導入されたことにより、バラッド詩の時空間が飛躍的に

<sup>60</sup> テキストは以下を参照。Блок А.А. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. М., 1997-.

<sup>61</sup> このほか、抒情詩『大晦日』(Ночь на Новый год, 1901) では、冒頭と末尾の2度に渡り『スヴェトラナ』の女主人公の名が繰り返され、『\*\*\* (白馬は疲労した脚を僅かに進め...)』(\*\*\*«Белый конь чуть ступает усталой ногой...», 1905) では、幽霊花婿について言及されている。

<sup>62</sup> テキストは以下を参照。Иванов Г.В. Собрание сочинений в трех томах. М., 1994.

<sup>63</sup> また、抒情詩『\*\*\* (さらば、さらば、大切なひとよ!)』(\*\*\*«Прощай, прощай, дорогая!», 1922)、および『\*\*\* (夕焼けは中空に追いやられ...)』(\*\*\*«Закат в полнеба занесен...», 1956) において、レノーレの名が軽い揶揄を込めて想起されている。

広がり(幽霊花婿=過去からの帰還者、超自然的騎行による超人的距離の克服)、詩の疾走感や躍動感(恐怖による)がはるかに増大したことが指摘できる。

### 3-3-7. アフマートヴァ<sup>64</sup>

アフマートヴァ(Anna Андреевна Ахматова, 1889-1966)は、『愛しいひとに』(Милому, 1915)において、幽霊花婿の形象を描き出した。幽霊花婿が墓の下で花婿を待つ胸中が一人称で語られる。

さらに、『ヒーローのいない叙事詩』(Поэма без героя, 1940-1962)では、全篇をとおして、ジュコフスキの『スヴェトラーナ』をはじめとする<レノーレ譚>のモチーフが繰り返される。「3部作(Триптих)」の副題が添えられた叙事詩には、冒頭に3篇の献詩がおさめられている。そのうち「第3の、最後の献詩」のエピグラフに、ジュコフスキの『スヴェトラーナ』冒頭の詩行(Раз в крещенский вечерок [さる洗礼祭の前に])が掲げられている。第3の献詩には、クリスマス週間、占い、幽霊花婿のモチーフが挿入され、第1部第1章のクリスマス週間の幽霊たちによる訪問の描写への橋渡しとなっている。第1章のエピグラフには、『オネーギン』のタチヤーナの夢に関する詩行(С Тагьяной нам не ворожить... [タチヤーナと私は 占いなど柄ではない…])が引用され、クリスマス週間(=境界的時間)の奇跡を暗示するものとなっている。<sup>65</sup>叙事詩は、全篇に幽霊花婿のモチーフがちりばめられ、<レノーレ譚>の筋をたどるものとなっている。とりわけ、第1部第3章・第4章には多くの<レノーレ譚>的モチーフ(クリスマス週間、鏡の占い、吹雪、馬蹄の音、花嫁の不

<sup>64</sup> テキストは以下を参照。Ахматова А.А. Собрание сочинений в шести томах. М., 1998. 邦訳は以下のとおり。アンナ・アフマートヴァ(木下晴世訳)『愛しいひとに』(『アフマートヴァ詩集 白い群衆・主の年』所収)群像社、2003年、110-111頁。アンナ・А・アフマートワ(江川卓訳)『ヒーローのいない叙事詩』(『集英社ギャラリー 世界の文学 15 ロシア III』所収)集英社、1990年、1075-1101頁。

<sup>65</sup> タチヤーナの夢が描かれる『オネーギン』第5章のエピグラフに、ジュコフスキの『スヴェトラーナ』の詩行(О, не знай сих страшных снов / Ты, моя Светлана! [おお恐ろしき夢など知らずにいてくれ / わがスヴェトラーナよ!])が掲げられていることを想起されたい。タチヤーナの夢について、詳しくは以下を参照。田辺「<タチヤーナの夢>の文学的背景」。拙稿「プーシキンと<レノーレ譚>」108-110頁。

実を責める幽霊花婿)が挿入され、叙事詩のなかで<レノーレ譚>のモチーフが重要な位置を占めている証左となっている。

### 3-3-8. ツヴェターエヴァ<sup>66</sup>

ツヴェターエヴァ(Марина Ивановна Цветаева, 1892-1941)の『若者』(Молодец, 1924)は、アフナーシエフの昔話『吸血鬼』に材をとった物語詩(「昔話」と銘打たれた)である。女主人公マルーシャは吸血鬼の若者に魅入られ、彼岸に連れ去られるが、実直な若者の愛の力で生者として甦る。ここで描かれるのは、プーシキンやゴーゴリの描く吸血鬼に近い、より土俗的な吸血鬼である。

### 3-3-9. ペトルシェフスカヤ<sup>67</sup>

ペトルシェフスカヤ(Людмила Стефановна Петрушевская, 1938-)は、連作短篇集『東スラヴ人たちの歌』(Песни восточных славян, 1990)において、現代ロシアの<レノーレ譚>を呈示した。『東スラヴ人たちの歌』という表題は、プーシキンの連作詩集『西スラヴ人たちの歌』(1834)をパロディ化したものである。先述のように、『西スラヴ人たちの歌』では3篇に<吸血鬼譚>のモチーフが織り込まれている。

『ソコリニキの出来事』(Случай в Сокольниках, 1990)では、第二次大戦開戦直後のモスクワを背景に、戦死した幽霊花婿(夫)の帰還が描かれる。ここで描かれる夫は騎手ではなく、パイロットである。『手』(Рука, 1990)では、幽霊花嫁(妻)との邂逅が描かれる。墓地からの帰路、大佐は焼け焦げた飛行機に搭乗する。飛行機は真夜中に離陸するが、着陸した先で死んだ妻に遭遇する。『小さなアパートで』(В маленьком доме, 1990)では、戦死した花婿(のちに自称花嫁の妄想だと判明)の帰還が示唆される。ペトルシェフスカヤは、20世紀的戦争表象、現代の移動手段(飛行機)、現代的(倦怠期の、妄想上の)幽

<sup>66</sup> テキストは以下を参照。Цветаева М.И. Собрание сочинений в семи томах. М., 1994.

<sup>67</sup> テキストは以下を参照。Петрушевская Л.С. Из пяти книг. М., 1996. 邦訳は以下のとおり。リュドミラ・ペトルシェフスカヤ(沼野恭子訳)『私のいた場所』河出書房新社、2013年。

霊花婿・幽霊花嫁の帰還など、現代的<レノーレ譚>のモチーフを作品に組み込みながら、<sup>68</sup> 18世紀以来脈々と受け継がれてきたロシアの文学的<レノーレ譚>を現代に甦らせていると言える。

### むすび

ここまで、18世紀末から現代にかけてのロシア文学における<レノーレ譚>の諸相を検討してきた。ロシアで多くの<レノーレ譚>的作品がうまれた要因としては、ロシアをはじめとするスラヴ世界に<幽霊花婿譚>や<吸血鬼譚>をモチーフとする民間伝承がもともと広く分布しており、<レノーレ譚>の筋を身近なものとして容易に受け入れる素地が備わっていたことが考えられる。<sup>69</sup>

本稿では、ロシアにおける文学的<レノーレ譚>の系譜に位置付けられる作品を可能な限りとりあげたが、これは興味深い現象の側面を照らしたにすぎない。各詩人や作家の作品に関する詳細な記述や分析は別稿に譲らねばならない。また、絵画や音楽などの芸術分野における<レノーレ譚>の諸相については殆ど言及できなかった。『スヴェトラーナ』をはじめとする文学的<レノーレ譚>をテーマにした絵画や音楽作品が一定数存在すること、<sup>70</sup> 近年、ツムシ

<sup>68</sup> 『小さなアパートで』に描かれる出来事がクリスマス週間に起き、「騎馬」警察が出勤し、真夜中（深夜零時過ぎ）に死んだ兵士（ヴィーチャの？）呻き声と泣き声がラジオから響き出すことにも注目したい。

<sup>69</sup> フォークロア研究者によるロシア版怪談ブイリーチカ（быличка, быль [実話、本当にあった怖い話]）の採集が本格的に始まったのは19世紀末だが、それよりもはるか以前から文学作品に採り入れられていた（チュルコフのクリスマス物語など）という。詳しくは *Душечкина*, С.85-86. を参照。ブイリーチカの採集史に関する詳しい邦語文献は以下のとおり。塚崎今日子「ブイリーチカ」（伊東一郎編『ロシア フォークロアの世界』所収）群像社、2005年、67-78頁。佐野洋子「第一章 ロシア口承文芸のジャンル分類」（『ロシアの神話 自然に息づく精霊たち』所収）三弥井書店、2008年、9-30頁。

<sup>70</sup> 『スヴェトラーナ』に想を得た楽曲に、カヴォス（Катерино Альбертович Кавос [イタリア名 Catarino Camillo Cavos], 1775-1840）のオペラ『スヴェトラーナ』（*Светлана*, 1822）、アーノルド（Юрий Карлович Арнольд, 1811-1898）のカンタータ『スヴェトラーナ』（*Светлана*, 1839）、Ф.М.トルストイ（Феофил Матвеевич Толстой, 1809-1881）の歌曲『愛しい人よ、僕は君のそばにいるよ』（*Я с тобой, моя краса*, 1846）、チャイコフスキー（Петр Ильич Чайковский, 1840-1893）の『12月：スヴァートキ』（*Декабрь. Святки*, 1876、ピアノ曲集『四季』より）があり、絵画にブリュエロフ（Карл Павлович Брюллов、

シュテークの歌曲『レノーレ』の楽譜の国内での発見を機に、ロシアにおける『レノーレ』や<レノーレ譚>への関心が再び高まりつつあることを考慮すると、<sup>71</sup>より総合的・多面的な研究が不可欠だと思われるが、それらの詳しい考察については稿を改めたい。

## 謝辞

研究の過程で、ドイツ文学者の高橋吉文先生（北海道大学名誉教授）に、バラード、ドイツリート、作曲家ツムシュテーク、マイヤーのナボコフ論について、<sup>72</sup>数多くの貴重なご助言、参考資料のご教示、ご提供をいただきました。心より御礼申し上げます。

※本稿は平成 26 年度札幌大学研究助成（個人研究）による研究成果の一部である。

---

1799-1852) の『占いをするスヴェトラーナ』(Гадающая Светлана, 1836)、ノヴォスコリツェフ(Александр Никанорович Новоскольцев, 1853-1919) の『スヴェトラーナ』(Светлана, 1889) などの作品がある。

<sup>71</sup> 2012 年、ペテルブルグの個人コレクションにおいて、ツムシュテーク (Johann Rudolf Zumsteeg, 1760-1802) の歌曲『レノーレ』(Lenore) の楽譜が発見された。ツムシュテークはドイツリートやバラードの礎を築いた作曲家で、レーヴェやシュェーベルトに多大な影響を与えた。楽譜はニコライ 1 世の皇后アレクサンドラ・フォードロヴナ (プロイセン皇女シャルロッテ妃) が父王フリードリヒ・ヴィルヘルム III 世から譲り受けたものである。1832 年にアレクサンドリンスキー劇場が建て直された際、新劇場のこけら落としに合わせて上演される予定だったが実現しなかった。一説には、ジュコーフスキイの翻訳詩『レノーラ』は、皇后の依頼によるものだとも言われている。180 年ぶりに手稿が発見されたのを記念して、ロシアでは歌曲が上演された。詳しくは URL (<http://www.lenore.info/>) を参照されたい (2016 年 2 月 29 日閲覧)。

<sup>72</sup> Priscilla Meyer, *Find what the sailor has hidden : Vladimir Nabokov's "Pale fire"*, Middletown, 1988. マイヤーはロリータの自転車走行にレノーレの騎行のモチーフを読みとる。